

歴史を語る建物たち

第2回

今日、20世紀型の開発優先社会は終息を迎え、文化、景観、観光などの側面から歴史的建造物が見直されるようになってきた。平成8年の登録有形文化財制度の発足などは、その象徴である。しかし、一方で、文化財指定を受けていないがその価値は十分にある古い建物が、道路の拡幅などで無造作に壊されていく現状もある。本シリーズでは、文化財指定を受けた有名建造物から、街中にひっそりとたたずむ建物まで幅広くスポットを当て、それらの歴史的経緯やエピソードなどを紹介する。

鶴岡ホテル（鶴岡市）



鶴岡市役所から南東の方向、旧一日市町（現、本町二丁目）の通称「一日市通り」に、一軒の純和風旅館がある。明治期に建てられた木造3階建ての鶴岡ホテルである。

入り口の開き戸を開けると、かつて人力車も出入りしたという広い三和土と、100年近くも時を刻み続ける大きな柱時計が、訪れた人を迎えてくれる。

まるで、そこだけ時が止まったような空間だ。

旅館なのに「ホテル」

鶴岡ホテルの起源は、越後（現在の新潟県）出身の初代地主廣治にさかのぼる。地主は当初、鶴岡の大地主である風間家に奉公していたが、独立の際、主の風間富治郎の屋号卍(カネト)にちなみ、卍(カネヒ)という名で呉服屋を始めた。明治10年代のことである。

当時、一日市町には呉服屋が建ち並んでいたが、卍では出入りの商人が建物内で寝泊まりするうち、いつしか旅館業が本業になった。そして、2代目が明治末

期に現在の建物を造り、「鶴岡ホテル」として開業した。

明治の文明開化によって、富士屋ホテル（明治11年）や帝国ホテル（明治23年）などがすでに開業していたが、地方都市の純和風の宿で「ホテル」という名称は、当時はさぞ珍しかったことだろう。なぜこのような命名をしたかは明らかでないが、2代目宿主の心意気が感じられる。



開業当初の鶴岡ホテル。建物の外観は今もほとんど変わっていない。出典：『鶴岡案内』（大正2年）

ちなみに、今でもここをビジネスホテルと勘違いして予約してくるお客もいるようで、4代目宿主は電話応対の際、必ず「うちは、名前はホテルですけど、和風の旅館ですよ」と前もって断るという。

政争の舞台となる

大正時代から昭和初期にかけて、日本では民政党と政友会が激しい政争を繰り広げていた。当時、鶴岡の宿は、伊勢屋旅館（現在は廃業）と鶴岡ホテルが規模的に抜きん出ていたが、伊勢屋旅館の主人が民政派だったことから、同旅館は民政派の定宿となり、鶴岡ホテルはこれに対抗して政友派の定宿となった。大正6年には、遊説に来ていた政友会総裁・原敬も鶴岡ホテルに投宿している。

このため、政党色を恐れた県庁職員などは、どちらの旅館に泊まることも避けたという。昭和5年8月10日の庄内新報は、「鶴岡はコワイ所、うっかり泊まれないと、官公吏は完全に回避、旅客は全く酒田に奪わる。政友は鶴岡ホテル、民政は伊勢屋」と書いている。



鶴岡ホテルに投宿した際の政友会総裁・原敬（大正6年）。「紳士道」にこだわった原が、横座りでくつろぐ写真は極めて珍しいといわれる。鶴岡ホテル所蔵。

進駐軍がやってきた

第二次世界大戦時、戦況悪化にともない、多くの都会の子どもたちが学童疎開で鶴岡へやってきた。鶴岡ホテルにも、昭和19年、江戸川第三葛西国民学校から約120人が疎開してきた。今でも、当時の疎開児童だった人たちが、たびたびここを訪れては昔を懐かしんでいると聞く。

そして昭和20年、日本は終戦によってアメリカの占領下となり、10月にはタイン中尉以下、約150人の進駐軍が鶴岡にやって来た。

鶴岡では、東北配電（現・東北電力）鶴岡営業所な

どが宿舎として接收されたが、上官たちは鶴岡ホテルに食事に来ることもあった。しかし、米兵は土足で食堂に入り込むため、3代目宿主が東京に住む設計士の友人に頼んで、当時畳敷きだった食堂を洋風に改築し、玄関の三和土から直接食堂に入れるよう、新たにドアも取り付けた。上官たちは、そこで食事や酒盛り、ダンスなどを楽しんだ。

なお、洋風の食堂は今も使われており、純和風旅館の中で、ひととき異彩を放っている。



三和土の右側に造られたドア。ドアの向こうは食堂になっており、進駐軍が土足で出入りできるよう、食堂も改築された。なお、このドアは、現在は使われていない。

外国人にも愛される「日本の宿」

鶴岡ホテルには、これまで、イギリス、アメリカ、オーストラリア、イタリア、フランス、ドイツなど、さまざまな国から旅人がやって来た。外国のガイドブックにも、「鶴岡の宿」として鶴岡ホテルが紹介されているものがある。あるアメリカ人は、ここに投宿して、「初めて日本に来た気分になった」という感想を残したといわれている。

そのほかにも、野口雨情や美空ひばり、岡本太郎、宇野重吉、有馬稲子、仲代達矢、杉村春子、布施明など、多くの有名人がこの宿を訪れた。特に、20世紀を代表する名女優・杉村春子（平成7年没）は、公演のたびにここを訪れ、帰り際に必ず「絶対壊さないでくださいね」と言い残していったという。

最後に訪れたときは80歳を超え、2月の寒い時期だったために、「すきま風が入って風邪でもひいたら困る」と4代目宿主は他の宿を勧めたが、彼女は頑として譲らなかった。それゆえ、電気ごたつや電気毛布、電気ストーブなどで部屋が配線だらけになり、「コードで足を引っかかないか心配だった」（4代目宿主）というエピソードも残る。

なお、鶴岡ホテルは国などの文化財になる資格を十分に備えているが、4代目宿主はあまり興味がないようだ。それもまた、この建物が持つ素朴な魅力である。

（荘銀総合研究所研究員・山口泰史）